

西表島水域漁場開発計画調査（要約） （ノコギリガザミ増殖場造成実験調査）

大城信弘・杉山昭博

友利昭之助・梶原智義*

本調査の詳細は昭和58年度、沖縄特定開発事業推進調査（昭和59年3月・沖縄開発庁沖縄総合事務局農林水産部）において報告したのでここでは要約を記す。

- 本調査は沖縄開発庁沖縄総合事務局の委託により昨年度に引き続き実施しているものでマングローブ地帯におけるノコギリガザミ増殖場造成の基礎資料を得るのを目的とする。
- 昨年度に引き続き、西表島船浦での野外生態調査と西表島全島の漁業実態の聞き込み調査を行った。
- 西表島では過去の最高時、昭和53年、54年頃には、ノコギリガザミは約10トンの漁獲があったものと推定されたが、現在はその半量以下の4～5トンと推定される。
- 外卵を有した雌の捕獲者が五者あるが、いずれも極くまれで、河口から海にかけての例であった。一例のみは河でもかつてはよく獲れたという事であった。
- 稚ガニは春～初夏にかけてマングローブ付近の干潟で見られるとの事であるが、観察者は少ない。
- 船浦での一ヶ月半後の再捕例では河川部の個体はあまり移動しない傾向にあり、干潟を越えて移動した個体は無かった。
- 稚ガニは3月にはすでに出現しており、産卵は冬季にも行なわれているものと推定される。
- 海上部では水深15m以深でも捕獲され、かなり広く分布していることが予想される。
- アミメノコギリガザミは早い個体は甲幅13cmから、多くは15cmから卵巣が発達するものと考えられる。
- 巣穴は岩の下や木の根際等に作られる例が多く、場所によってはかなりガザミに利用されている。しかし一般的には巣穴を利用しているものよりは潜砂している個体が多いものと思われる。
- 増殖手法の一つに、漁獲後のニッチの補充として人工種苗の添加も有効な手段と考えられ、また稚ガニが比較的限られた場所に分布する傾向にあることから、そこでの人為的な保護育成も可能と推定される。
- 定住性が強い事から自然環境をそのまま利用した、半養殖的増殖も可能と推定される。

* 非常勤職員